

# 音楽を伴った体験型ソーシャルスキル トレーニングの開発と研究

長田有子 (チャイルドリサーチネット 研究員)

## 臨床発達心理学を踏まえた音楽療法

平成17年4月から施行されている特別支援教育法では、発達障害を早期に発見し、個人に対応した支援を図ることをうたっている。しかし、早期治療における具体的な支援方法や治療方法が確立されておらず、地方自治体には援助する外部機関や専門家が少ないのが現状である。支援のための新しい教材や学習方法を開発し、さらに個人に対応するプロフェッショナルな教え方をどのように展開するかが早急な課題である。

従来の音楽療法は、クライアントとセラピストとのコミュニケーション活動を中心とし、関係を深めることや、運動に音楽を用いて感覚運動機能の発達を促すことや、また精神病をもつ患者に音楽によってリラクゼーションさせる精神的心理療法として行われてきたが、子どもの発達を臨床発達心理学的背景から捉え、発達の課程にあわせた構造的で統合された課題が未開発であった。本研究においては、その未発達の分野における音楽を用いた学習支援課題を開発し、さらに個人の差異に添った個別プログラムを作ることを目指し、どのように治療教育を構造的に組み立てるかを研究した。

本研究は、2000年からチャイルドリサーチネット研究所によって行われた実験研究から始まり、東京都永山市の廃校になった小学校の「ちーきち」という場を活用して続けられた。そこで開発された新しい教育ソフトや実践方法は発達障害をもつ子どもや虐待を受けた子どもたちへの治療教育の場で実践し、その効果を検証した。子ども学の視点をふまえながら、子どもにとって受け入れやすいメディアや音を手がかりとする発達支援課題を各領域（学習、視覚、聴覚、行動・情緒、社会スキル）で制作することを目的とし、臨床の場において実践し、その有効性を実証した。

言語的指示によつての指示理解が困難な障害児にとっては、言葉による指示や解説だけで社会性や集団性を理解するのは困難であり、多様なメディアを活用し、学習そのものを興味のある対象として楽しいものにするのが求められている。音を用いた課題は、多

様なメディアと複合し、子どもに興味をもたせることが可能となり、さらに音楽のもつ特性により記憶、想起しやすい課題となり、表象を生み出しやすくし、支援を可能とする。これらの課題は教育工学技法と人のもつ聴覚に対する生理的しくみを用いて制作され、学習支援のみならず、社会スキルを向上させる有意性をも導き出すことができた。

音楽を用いた学習支援課題として、①言語能力系教化課題（文字・識字、逐次読み、特殊音節、漢字の読み、ひらがな書き、漢字の書き、絵画配列、歌による言語）

②数的能力系教化課題（数概念、数字、大小、加算、引き算、数唱、形態概念）③視覚系能力教化課題（目と手の協応、空間位置、視覚的記憶、視覚的注意）

④聴覚系能力教化課題（聴覚的注意、聴覚的記憶、音の聞き分け、音から字への変換）⑤運動系能力教化課題（姿勢の保持、筋力、全身の協応、道具を介した協応、左右の協応、バランス）⑥行動・情緒系能力強化課題（指示の受け入れ、緊張、こだわり、多動性、衝動性、無気力の抑制）⑦社会スキル系能力教化課題（対人関係、共感性、協調性、価値意識、社会的責任の体得）の個々について、課題を制作した。

セッションは、1時間内に複数の課題を切り替えながら実行するために集中が途切れることなく発達のレベルによって進行していくように構造化した。

## 新しい発想と臨床デザインによる成果

本研究において識字、数概念を習得することが困難であった障害児において音や音楽を用いた課題を実行することにより、学習の習得、またソーシャルスキルの習得が可能となった。5歳児の知的障害児は4年にわたるセッションにおいてIQ38（田中ビネー検査）からIQ60へと知能指数が飛躍的に向上し、学年相当の漢字を記憶し、かけ算、わり算も理解し、安定した情緒を獲得し得た。また4歳時において自閉症と診断されたある子どもの症例では、津守式発達検査においてPA41であり、言語性1歳9ヶ月であったが、6歳時にこの療法を開始し、4年後の10歳時にはWISC

